

実践主題

主体的・対話的で深い学びを視点にした授業改善  
～国語科における聞き手の意識を高める話し合い活動の工夫を通して～

### 1 実践主題設定の理由

これまで、児童が主体的な学習に取り組めるよう、各教科等において児童同士の話し合い場面を数多く設定してきた。充実した話し合いとなるように、自分の考えが持てるようワークシートを工夫したり、声の大きさや間合いなど相手意識を持った話し方ができるよう指導したりしてきた。その結果、ワークシートに書いた意見を基に各自が発表し合い、活発な学習活動が行われるようになった。

しかし、グループの話し合いの様子を注意深く観察していると、児童一人一人が順番に意見を発表し、相手はそれを聞いているだけということが多かった。自分と意見が違っていても、それについて質問したり、同じ意見に共感したりする様子はなく、「話し合い」というよりも「ミニ発表会」のようになっていた。また、一部の児童が意見を発表し、他の児童はそれを聞いているだけという様子が見られた。これは、児童に話し合いの目的をしっかりと確認させたり、目的に迫るための話し合いにするにはどうすればよいか考えさせたりすることなく話し合い活動をさせてしまっていたためと考えられる。

本実践では、児童一人一人がねらいを達成するための手立てとしての話し合い活動の効果的な在り方について、国語科における実践を通して明らかにしたいと考えた。考えを深めたり・広げたりする話し合い活動のためには「自分の考えをしっかりと持つことで、話し合いでも自信を持って発言できるようになるのではないか」「話し合いの目的を明確にし、聞き手の意識を高めることが、深い学びへとつながるのではないか」と考え、その部分を重点課題として授業改善を行った。

### 2 実践のねらい

国語科における聞き手の意識を高める話し合い活動の指導の工夫を通して、主体的・対話的で深い学びができる児童の育成を図る。

### 3 実践の内容及び方法

話し合い活動は、主に「①自分の考えを持つ→②考えを基にグループで話し合う→③話し合ったことを全体で確認する」といった流れで進められる。各場面における課題から、その課題を解決するために3つの授業実践を行った。

まず、児童が自分の考えを持たないまま話し合いをしても、意見が言えずに聞いているだけになってしまうということが課題として挙げられる。1つ目の実践では、「自分の考えを持つことで、進んで話し合いに参加できるであろう」と考え、考えを引き出すための例示資料の作成とワークシートの工夫を行った。

実践1の結果、各自が意見を持って話し合いに参加することができ、話し合い活動は活発になった。しかし、話し合いの様子を見ていると各自がそれぞれ自分の意見を発表して終わり

になってしまったり、ねらいとは外れた話合いになってしまったりしていることが課題として挙げられた。そこで、2つ目の実践では「ねらいに沿って話し合うことの大切さや、質問したり同意したりすることの大切さに気付かせることで主体的・対話的で深い学びにつなげることができるであろう」と考え、話合いの良い例と悪い例のロールプレイを通して、児童自身が「話合い活動をするときに大切なこと」を見いだせるようにした。

実践2の結果、話し合う中で「ねらいに近い意見は～」という声が聞かれるようになった。しかし、相手の意見に対して同意や質問をする様子はあまり見られなかった。また、意見を出し合った後は、一部の児童の考えで話合いが進んでしまうことも多かった。そこで3つ目「相手の意見に対して同意や質問をしやすくすることで、主体的な話合い活動になるであろう。」と考え、自分の意思を明確に表示でき、意見を言う手助けとなる「話合いカード」を用いた実践を行った。話合いカードを使うことで、今まであまり意見を言えなかった児童も進んで意見を言ったり、友達の意見に対しての質問や同意ができた。3つの実践を通して、児童は「話合い活動をすると、今まで自分になかった考えを持ってうれしい。」「みんなで、意見を出し合うことで、最初よりいい意見になった。」という感想を持つことができた。

#### 4 実践の経過と結果

##### (1) 実践1 国語科 単元名「広がる、つながる、わたしたちの読書」

まず第1の実践として6月に、国語科「広がる、つながる、わたしたちの読書」の単元において、推薦したい本のポップ作りを行った。教科書に載っている「千年の釘にいどむ」を題材に教師が作成した2つを比較して、ポップ作りで大切なことについて考える活動を行った(図1)。ポップになじみがない児童に例を見せることで、自分たちのポップ作りの見通しを持たせるとともに、比較することで児童自身でポップ作りの大切な点に気付かせるようにした。

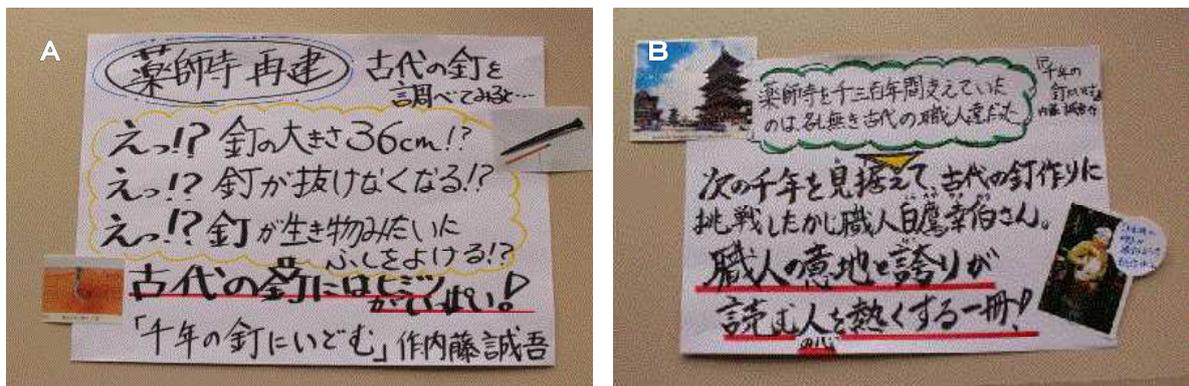


図1 比較用のポップ

また、児童が気付いたことを整理しながら記入できるようにワークシートを工夫した(図2)。ワークシートに載せられた例示を見比べながら、気付いたことをまとめていくことで、全員の児童がポップ作りで工夫する点についての気付きを書くことができた。

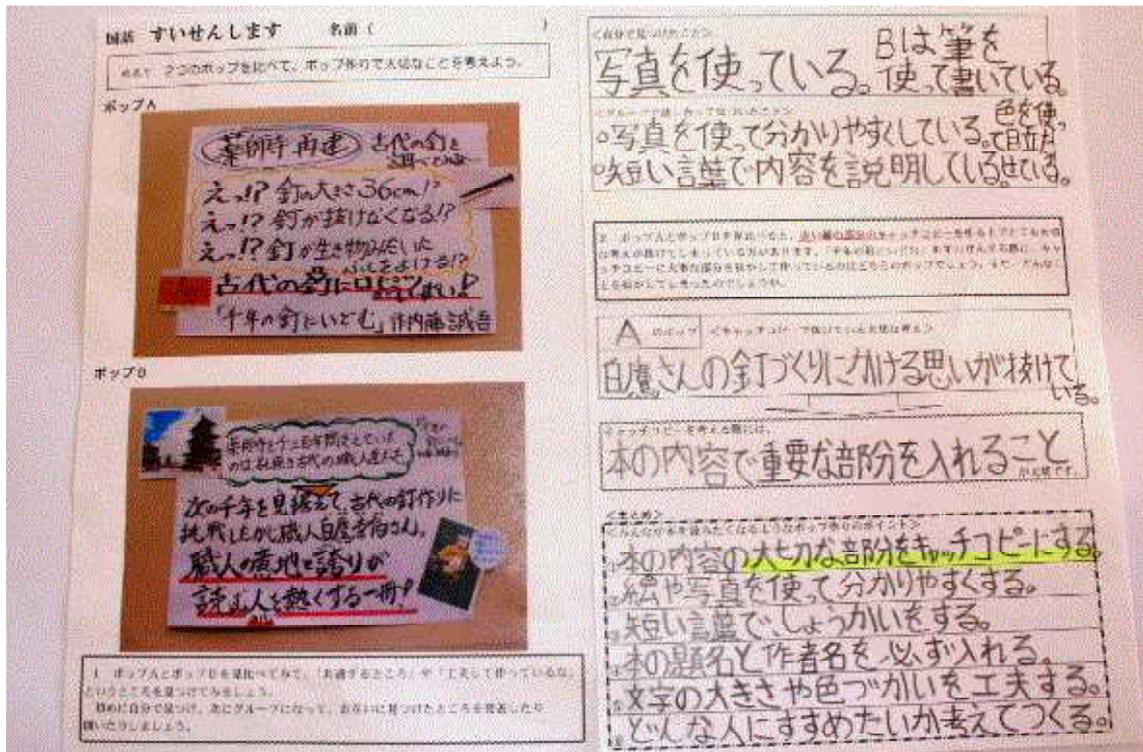


図2 ワークシート

自分の意見をしっかりと持つことができたため、グループでの話し合いは、活発に行われた（図3）。

完成したポップを見ると、事前に例示したものを検討したり、話し合いをしたりしたことによって、児童は本の要旨を捉えたものにする事ができた（図4）。

完成したポップを本と一緒に展示したところ、児童は並んでいる本を手にとって興味深そうに読んでいた。また、夏休みに本の貸し出しを行った際には「これは、〇〇君が薦めていた本だから読んでみよう。」といった声も聞かれた。比較資料の提示やワークシートの工夫により話し合いの内容を充実できたことで、「推薦したり、推薦されたりした本を読むことで、豊かな読書生活につながる」という本単元のねらいにせまることができた。

しかし、「どちらのポップが良いか」という点においては、キャッチコピーの内容ではなく見た目だけを論点としてしまい「Aの方が良い」という意見が出ていた。話し合う様子を見ていると、お互いの意見が違って



図3 例示を活用した話し合いの様子

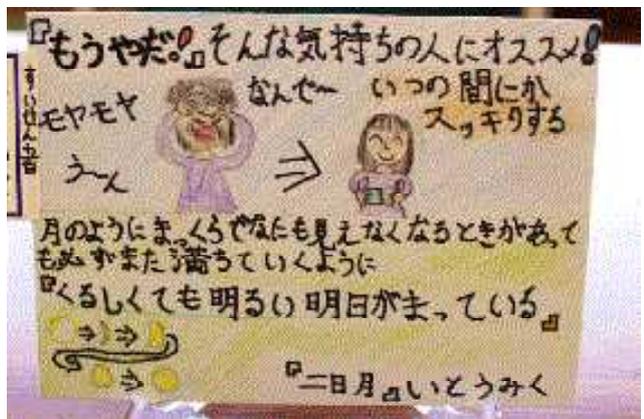


図4 児童の作成したポップ

いても、質問したり検討したりすることができていなかった。これは、話し合いの軸となるべきねらいが児童に徹底されていなかったからであると考えられる。話し合いを中断し教師が「作者の伯鷹さんが2つのポップを見たときはどちらが良いと思うかな。」と投げかけると、ようやくキャッチコピーの内容に目を向けた話し合いになった。

実践1を通じて、ねらいの達成に向けた話し合いのためには「ねらいに沿って意見を出し合うこと」と「相手の意見に対して自分の考えを伝えられること」が大切であると改めて感じ、その能力を育てるための授業実践が必要だと考え実践2を行った。

(2) 実践2 国語科 単元名「話の聞き方を考えよう」

実践2において、7月に話し合いのスキルアップを目指して自作の資料を使って実践を行った。「ペットにするには犬が良いかねこが良いか」について話し合っている場面を台本としてロールプレイを行った。悪い例であるロールプレイAは、ねらいからそれていたり、お互いの意見が平行線だったりする内容で、良い例のロールプレイBはねらいに向けて、意見を出し合ってよりよい意見へとようになっていく内容となっている(図5)。

2つの台本を読み比べ、グループで話し合ったことを発表してもらおうと「Bの方は、目的に合った話し合いをしている。」

「Bは分からない部分を質問していて、相手が答えることで考えていることがよく分かった。」「Aはみんな意見がバラバラのまま多数決をしてしまっている。」

「Bは意見が変わった人もいたけれどみんな納得していた。」といった意見が出た。出された意見は、掲示してある台本に書き込んでいき、集約をしていった。

本時では、児童から出された気付きを基に「話し合いの目的からそれないこと」

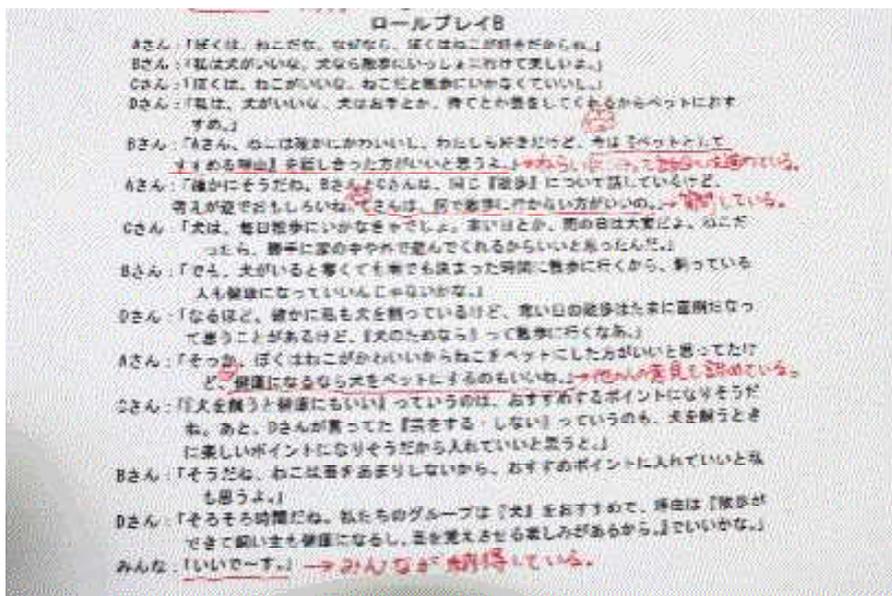
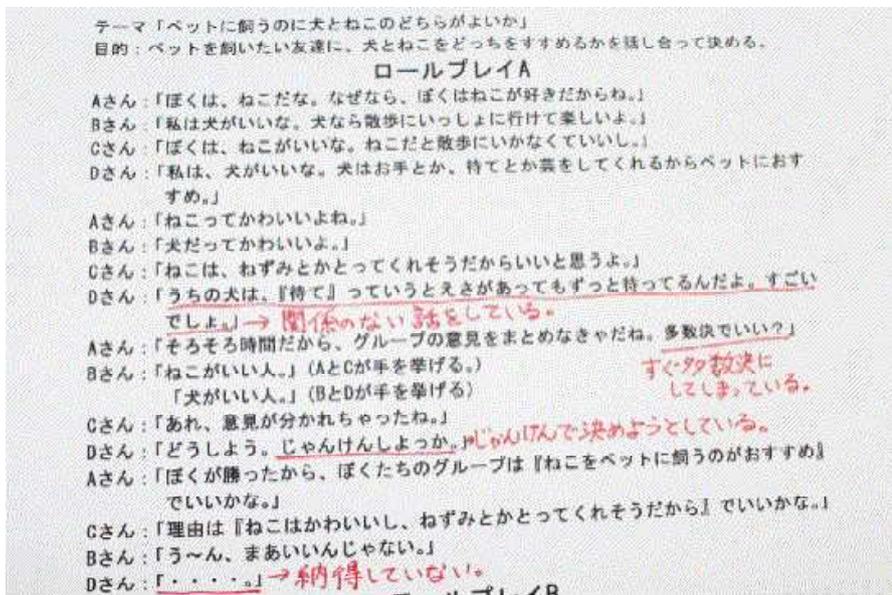


図5 ロールプレイの台本(赤字は児童から出た意見)

「質問することで相手の考えを引き出すこと」「他の人の意見を基に自分の考えを深めること」といった、「話し合いのときに大切なこと」をまとめていった。良い例と悪い例を比較して検討したり、実際に台本を読みながら話し合いを進めたりすることで、児童自身から上記した「大切なこと」を引き出すことができた。

実践2を通じて、児童はお互いが意見を言うだけの話し合いでは、自分も全体の意見も高まったり深まったりしていかないことに気づき、ねらいに向けて話し合いを進めたり、出された意見に対して質問したりすることが考えを深めたり広げたりするために大切であるということを学ぶことができた。

本実践を児童が目指すべき話し合いの流れを共通理解することができたため、話し合いの初めに、「まず、今回の活動のねらいについて考えましょう。」といった発言が、児童自身から出されるようになった。しかしながら、意見を言う児童がいつも同じであったり、考えを持っていても自分から言い出せない児童がいたりという点においてまだ課題が残った。一部の児童だけではなく、全員が話し合いに参加することができるようにするため、実践3を行った。

### (3) 実践3 国語科 単元名「明日をつくるわたしたち」

実践3では、9月に国語科「明日をつくるわたしたち」の学習の中で「よりよい岩島小学校にするためにできること」についてグループ毎に話し合い、それぞれが提案書で取り上げるテーマを決め、提案書を書く活動を行った。

本実践では、まず児童全員が自分の考えを持って話し合いに参加できるように、ワークシートに自分の考えをまとめる時間を十分に確保した。自分の意見を進んで言える児童に司会役を任せ意図的なグループ編成を行った。その児童を中心に全員の意見を引き出したり、意見をまとめたりできるようにした。

実践3の中心授業においては、まず導入の部分において、既習事項である話し合いをする際に大切なことを全員で確認した。また、今回の話し合いのねらいと進め方、司会の役割を掲示しておき、いつでも確認できるようにした(図6)。また、全員が意見を言ったり、意見

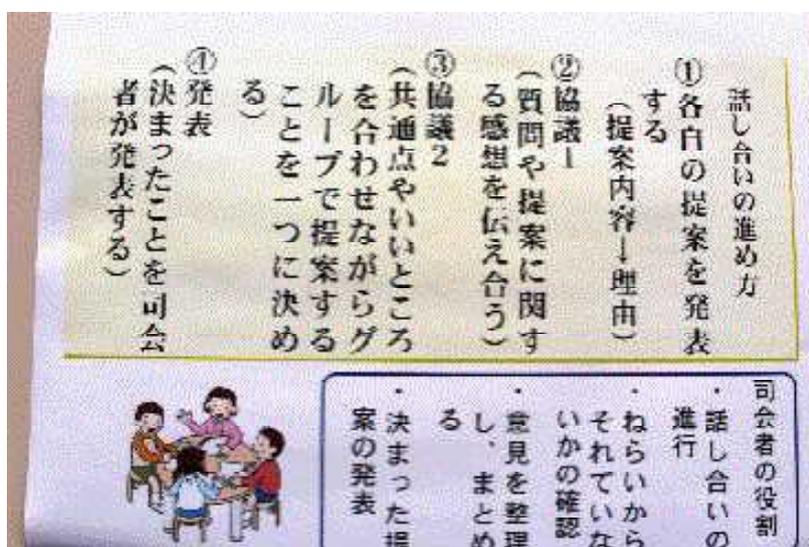


図6 掲示した「話し合いの進め方・司会者の役割」

に対して自分の考えを伝えたりしやすくするために、「話し合いカード」を作成しそれを活用して話し合いを行った。カードの表には意見を出し合うとき、意見を練り上げていくときのキーワードを書き、裏には意見の伝え方の例を載せて、それを見ながら意見を伝えられるようにした。カードは主に意見を出し合うときに使う物(緑)、意見を練り上げるときに使う物(青)、意見の集約をするときに使う物と(赤)、使う場面に応じて色分けをした(図7)。



図7 話し合いカード

話し合いの様子を見ていると、普段あまり自分から意見を言うことができない児童も話し合いカードに手を伸ばし、友達が言った意見に対して自分の考えを明示しながら、積極的に意見を伝える様子が見られた。また、今までの話し合いではあまり見られなかった、意見に対しての質問や、ねらいから遠くなってしまうような意見に対するアドバイスなども見られた(図8)。



図8 カード使って意見を伝え合う様子

次時において、グループの意見を練り上げていく場面では、前時までに話し合ったことを基に、意見集約のワークシートを活用しながらグループで提案する内容を決めていった。意見をまとめていく場面においてもねらいを意識しながら話し合いができるように、ワークシートにねらいを明記した。ワークシートを見ると「メリット・デメリット」についてや、「共通点は」などといった、前時で話し合った際に使ったキーワードが書かれていた。また、各個人の意見を記入し、全員の意見を大切にしながら検討している様子が見られた(図9)。司会役に当たった児童は、自分が話すだけでなく、意見をつなげる発言をしたり、発表を促したりすることができていた。また、ねらいを軸に据えて話し合うことにより、自分の意見と違う意見や反対する意見であっても納得して聞き入れていた。

意見を発表して終わりではなく、意見を基にさらに話し合いを進めたり、「よりよい岩島小学校にするためにできることの提案書を書こう」というねらいを軸としたりすることで、全員が話し合いに参加し、より具体的な活動内容を考えた提案にすることができた(図10)。

ねらいを明確にし、質問や同意を促す話し合いカードを活用したことによって、児童は主体的に話し合いを進めることができ、本単元のねらいである「互いの立場や意図をはっきりさせながら話し合うことができる。」を達成することができた。

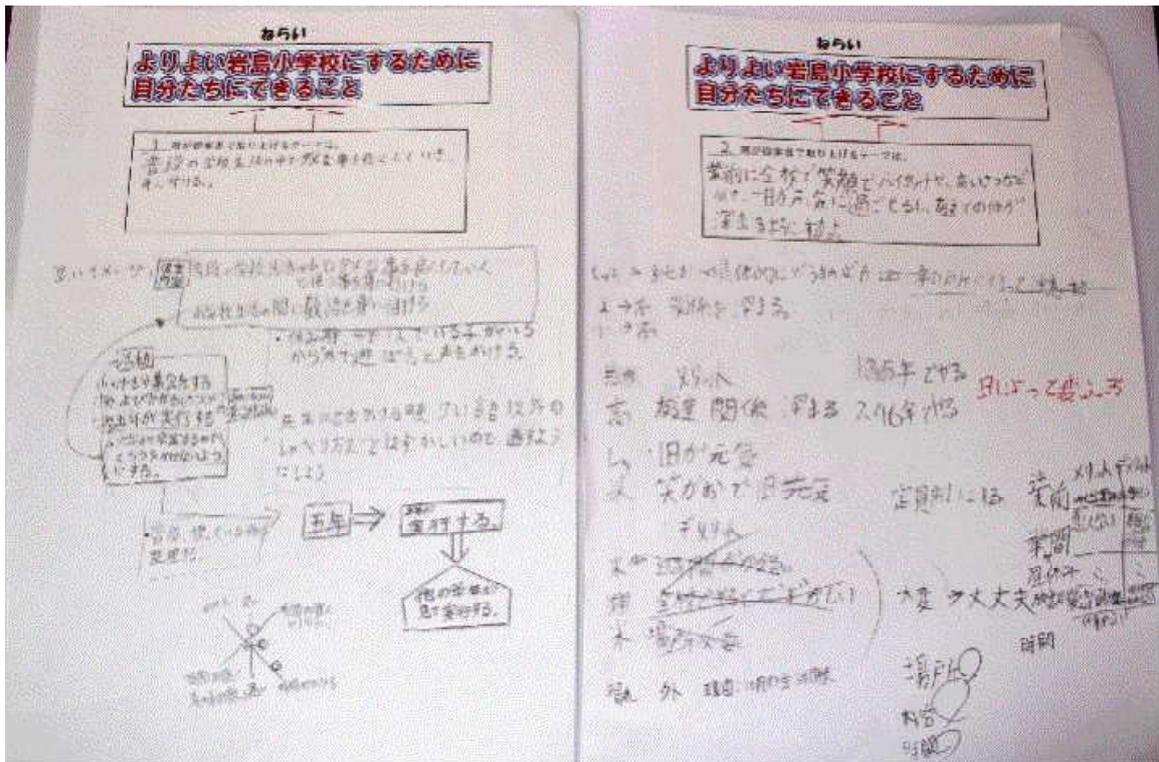


図9 意見集約のためのワークシート

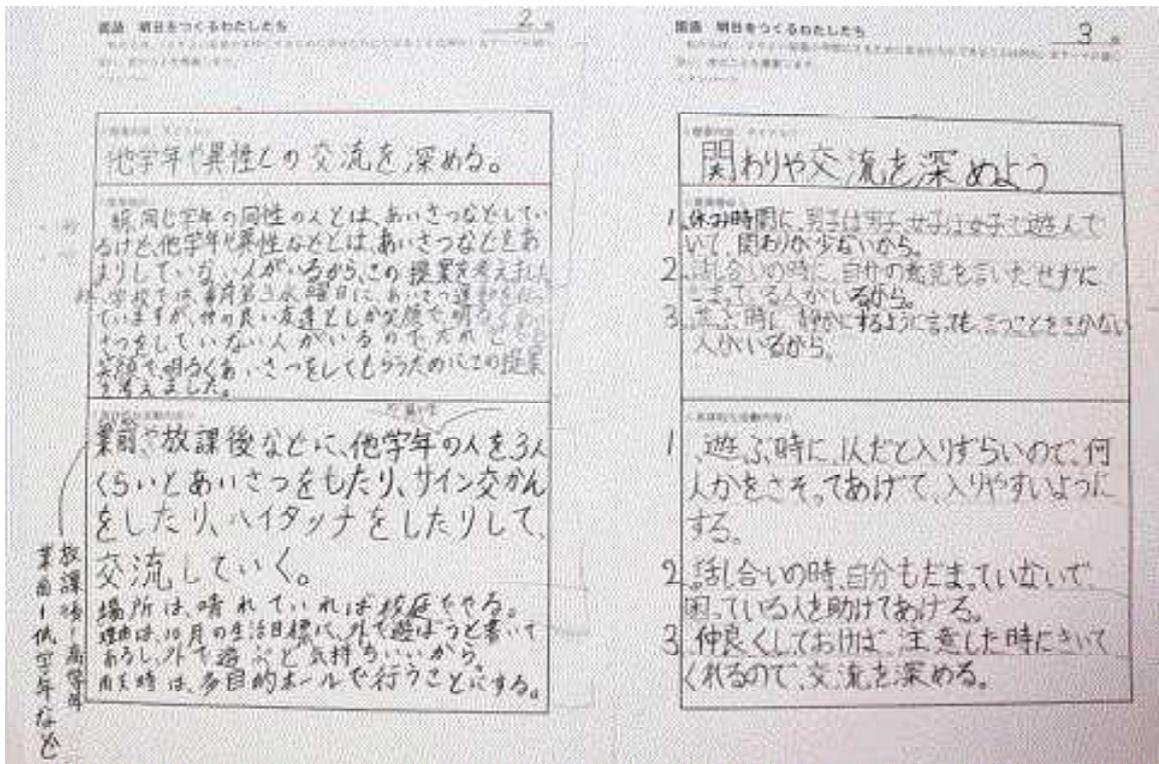


図10 各グループの提案

## 5 まとめ

本実践では、国語科の領域「話すこと・聞くこと」における話し合い活動の指導の工夫を通じて、主体的・対話的で深い学びを目指した。

これまで、自分の意見をしっかり持つためのワークシートの工夫や相手を意識した話し方について重点的に指導の工夫を行ってきた。そうした手立てをとることによって「話し合いがスムーズに進む＝授業がうまくいく」と考えていた。自分の考えを持ったり、相手に自分の意見を伝えたりする能力を身に付けさせ、話し合いを充実させることは大切なことである。しかしながら、話し合いはあくまでもねらいを達成するための手段であり、それが目的になってはいけないという思いを持ち、本実践を計画した。それにより、単元のねらいにせまるための話し合い活動にするためにはどうすればよいかを考え、「聞くこと」に重点をおいて指導の工夫を行うことができた。

「ねらいに向けて全員が意見を練り上げながら話し合うことで提案書の内容を充実させる」という目標を明確にし、それに向けて「話がそれないようにするためにはどうすべきか」「意見が言えない児童も参加できるようにするためにはどうすべきか」といった課題を解決するための手立てを考えていった。児童の実態に目を向け、課題を明確にすることで、「ロールプレイ」や「話し合いカード」といった具体的な話し合い活動の工夫を取り入れながら授業改善ができた。新しい指導の工夫を生み出し、ねらいにせまることができたことは大きな成果となった。

また、児童が2学期末に行った「話す・聞く自己評価」を見ると「話し合いによって、多様な考えを持ったり考えが深まったりすることがあるか」という質問には、5年生全員が「よくある」または「ある」と回答していた。理由を見ると「みんなが違う意見だと『よくと同じような考えだな。』『そっちの方がねらいに近いな』』といろいろな意見を持てるから」「友達の意見を聞くと『そんな考え方があったのか』と自分の意見と比べて参考になるから」といったことが挙げられていた。

実践を通じて、児童の中に「話し合い活動は、考えを深めたり広げたりすることができる活動である」という気持ちを養えたことも今回の実践の成果と言える。

また、国語の授業の成果により、算数科の授業で考えを班ごとにまとめたり、学級活動で議題に向けて意見を集約したりする際にも、ねらいを大事にしたり、意見を基に話し合ったりといったことを大切にして取り組めるようになった(図11)。

課題としては、話し合い活動を取り入れると、時間がかかってしまうということが挙げられる。特に、出し合った意見を書く活動を入れると、時間がかかってしまうことが多い。1単位時間の中では、どこまで話し合わせるかを明確にして授業計画を立てることが必要である。また、付箋を使ったりホワイトボードを使ったりと、効果的・効率的な意見の発表や集約の方法をさらに考えていくことが必要である。

どの場面で話し合い活動を取り入れて課題を解決させていくことが、ねらい達成に効果的であるか含味しながら、今後も主体的・対話的で深い学びにつながる話し合い活動の工夫をし、実践を重ねていきたい。



図11 算数科における話し合いの様子